

のではない。魯公の「坐位帖」は、天趣横溢、一時興到の作にして、龍蛇夭矯、提擲すべからず、他人はこれを摹すること、尙易すからざるのである。唐人の行書は多く「聖教」を宗とし「魏逸墓志」、「梨園店經幢」の如きも、皆な能く其の三昧を得て居るが、一たび變じて蘇靈芝となり、再び變じて田穎と爲つた、熟じやくに過ぐれば則ち俗、流弊の然らしむる所なりと謂つて居る。

又曰く、李北海は、盛唐に崛起したが、其の源は、矢張り「聖教」より出て居る、唯だ筆を縦つて、これを爲し、姿態横生、天馬空を行くの概がある。蘇蘇東坡趙趙子昂は、これに依つて能く其の開張の所を得たが、其の飛舞の所を似することは出来なかつた、盧藏用の言に、北海は、人

と爲り干將莫邪の如しと謂つて居るが、今其の書を觀るに、實に其の通りである。又曰く、章草の碑刻は、極めて少ない、孫過庭に至つて、微しく其の法を變じ、顧素の草書は、已に章草の範圍を出で、此の後は、多く意を以てこれを爲し、古法亡びたり云々。

唐代の行草に就ては、これで略ぼ悉して居ると思はれる。

(考)

梁同書曰く、唐碑中で、蘇靈芝の一派が、最も俗だと云ふが、誠にさうである。然れども解すべからざるは、獨り此れのみではない、即ち北海の「雲麾碑」、魯公の「明遠帖」の妙處も、亦た之を知らない、柳公綽の「武侯廟碑」の如き

に至ては、唐碑中に至つて、晋法を爲すものである。至て佳なるものとは謂へないが、未だ厚く非とすべからざるものである。

李邕(唐人)

名は邕、字は太和、汲郡北海の太守に至つた、故に世に此人を李北海と云ふ、北海は文を能くし、書を善くした處から其碑頌は多く自ら之を書したばかりでなく、又自ら之を刻したと云ふことである。其人と爲り、大節磊々、嘗て宋璟を助けて、張昌琮を劾したこともあるが、其仕ふるや、始め韋氏に沮まれ、中ごろ張說に忌まれ、遂に事を以て李林甫に誅せられたが、才名四十年、君子之を惜むと傳へられて居る。

雲麾將軍李思訓碑(李北海行書)此碑蒲城縣に在り、断裂既に久しかりしを、正徳中御史劉遠夫謫せられて蒲城の尉となり、訪ねて之を出し、錮するに鐵を以てし、復た完物となれるも、下半模糊として搨本多く全たからず、楊守敬曰く「李北海獨り出でて時に冠たり、其李思訓碑は、風骨高蔘にして、李秀碑は雄渾深厚、而して麓山寺碑は、用筆結體二碑の間に在り、董香光の謂はゆる、右軍は龍の如く、北海は象の如きもの是なり」と、宋以後の書家、行書に於て殆ど此の碑を學ばざるなく、蘇東坡の如き、趙子昂の如きも、また北海の體勢を受けて、風捲雲舒之に逼るものありと云へり、有名なる碑なり。

懷素(唐人)

懷素、字は藏眞、長沙の人、自ら草書三昧を得たりと云ひ、勤苦して書を學んだ、性顛狂にして、奇行多く、世に顛素と稱せられ、其の書は所謂狂草にして、奔放の觀ある如きも、或はまた、これを稱して「謹嚴の極と謂ふべく、若しも顛狂と爲して、これを學ばんか、宋の向氏が、盜を學ぶと少しも異なる所はない」と云つて居る。其の書として傳ふる所には、「自叙帖」、「聖母帖」、その他甚だ少なからず、多くは狂草の體を帯びて居るが、眞に素の筆なるや否や、容易に信ずることは出來ぬ、獨り其の「草書千字文」は、素の書として、大に學ぶに足るものがある。

千字文(懷素草書)其文字に大小數種あるが、比較的字的小さい、世に所謂千金帖と稱するものを佳なりとす、「停

雲館の刻本で、墨迹は焦山に藏せられ、寺僧またこれを刻し、古勁純雅、自らは是れ眞跡たり、焦山にも亦た一本あり、稍や圓潤なれども、亦た佳なり、關中にて刻する所の大字千文は、惡道俗劣にして、眞に米元章が謂ふ所の酒肆の書である。鳴鶴翁は、「經訓堂帖」に在るものが、宜からうと謂つて居られた。

自叙帖

自叙帖(唐人) 其眞迹は南唐李氏の物たりしが、清初の頃、徐宮傳謙齋の所藏たり、空青老人題して云ふ、自叙帖世に傳ふるもの三あり、一は蜀中石陽休の家にあり、黄魯直が魚牋を以て數本を臨せるもの是なり、一は馮當世の家にあり、後ち上方に歸す、一は蘇子美の家に在り、吳中に流傳すと、傳へらるゝも、楊守敬は「宋の集帖」に多

く刻する所を見るに、纖弱狂怪にして、一の佳なるものなしと謂つて居る。

聖母帖

聖母帖(同上) 筆勢縱横にして、頗る讀み難し、刻石は陝西省西安の府學にあり。頗る圓潤にして、嶺氣なし。

律公帖

藏眞律公帖(同上) 殊に勁健なりと稱せられ、石は關中に刻せらる。

苦筍帖

苦筍帖(同上) 「廣古超邁、一代を烜赫するに足り、恐らくは顔魯公これに過ぐる能はず」とは、楊守敬の評である。「詒晉齋帖」、「鄰蘇園帖」ともにこれを收む。

孫過庭(唐人)

○

鳴鶴

懷素是狂張旭顛 當時草聖世喧傳

唯知正脈山陰訣 別有過庭譜一編

名は過庭、字は虔禮、陳留の人、「書譜」を著はし、又草書に巧みなるを以て有名であるが、草書は二王を法としたと傳へられ、鳴鶴翁また嘗て、其の「書譜」の佳本を得、これに依て、大に益を得られたことは、「學書經歷談」にも見えて居る。

書譜

書譜(孫過庭章草)は支那書道の變遷を歴叙して、比較的正確に、且つ詳細なり、其の書體は、章草なり、孫過庭は、王羲之の崇拜者にして、其書風は羲之の眞髓を得たるものとして稱せらる、羲之諸帖の良刻なき今日に於て、過庭の舊刻を得ば、頗る好都合なれども、是亦た容易に得べからず。「太清樓」本は南海伍氏に依て翻刻せられ、ま

た薛紹彭、停雲館の刻本あるも皆佳ならず、清初の安麓村が刻する所は、絶精と云ふべく、陳香泉の釋文がある、磨泐の處あるは、惜むべきも、此の帖より翻刻したるものは皆な觀るに足る。

千字文

千字文(同上) 餘清齋、内府ともに刻本がある。

唐朝の篆隸

唐隸見るに足らず

唐隸を學んだものは、隸書の眞味を知るを得ず、随つて我邦には、古來隸書の名手を出さなかつた、蓋し諸體のうちで、隸書は唐代の最も不得意とする所であつたからである、故に唐には、隸書の觀るべきものは、一も無いと謂つて宜しい、無論一として學ぶに足るべきものはないのである。

篆書も亦た、唐代は甚だ振はないのであるが、此に一つの除外例がある、それは李陽氷と名づくる篆書の天才が、其の間に起つて、唐代の篆書に、至重なる地位を與へたことである、既に是まで、幾たびも述べた如く、秦の篆書は、石刻として傳はるものが、殆んど絶無で、僅かに五權の銘などから、其の血脈を搜り得るに過ぎざる今日に當りて、漢魏を超越して、直に李斯に接すべく、李陽氷の世に出でたことは、篆文の爲めに、最も慶賀すべきこと、謂はねばならぬ、唯だ憾むらくは、李陽氷の石刻も、また原石を存することの少ない一事である、併しまた原石の残つて居るものもあるから、就て學ぶには差支ないであらう。

(考)

楊守敬曰く、唐人の分書は、整齊を以て工みと爲すので、韓擇木・盧藏用・蔡有鄰の諸作は、一手に出たもの、やうである。唯だ李陽氷の篆書は、推して直ちに李斯に接すと爲すのであるが、今傳ふる所の「三墳記」、「栖先塋」の諸刻を以て、漢の「嵩山少室」、「開母」等の諸刻碑に視ぶれば、已に古今の別がある、泰山・瑯琊の諸作は云ふ迄もないことである。

李陽氷(唐人)

名は陽氷、字は少温、趙郡の人で、最も篆書に長じ、自ら以て李斯以後の一人とするのみならず、其篆書が、漢代を超えて、直ちに秦に接することは、何人も之を認む

李陽水の篆は
直に李斯に接
す

三三二

る所であらう。併し今日傳つて居る所の、李陽水の碑には覆刻が多い「縉雲縣城隍廟碑」「三墳記」「先塋記」「庾貴德政頌は、既に後人の重摹を経たもので、原石ではない、「般若臺」は、字體は較や大きい、力小さくして、任重きの憾みがある、獨り「怡亭銘」のみは、原石を存し、由て以て李斯の意を窺ふことが出來、「五臺山清涼山碑」も、亦た的筆に係り、未だ後人の重摹を経ないが、唯だ惜しいことには、拓本が少ない、「永州」「浯溪」の諸刻は、均しく「怡亭」に遜る傾向がある。斯る有様であるから、餘程選擇しないと、誤りを傳ふる虞れがある。

五代の風氣

今更ら事新らしく云ふ迄もないが、古來支那の書體は、

政治の革命は
書道に及ぶ

政治の革命ある毎に、其の影響を受け、秦・漢・六朝・唐・宋・元・明・清に至るまで、皆な然らざるなき有様で、其の時代時代の文字には、必らず多少の取るべき所がある。

唐の文明は、支那の歴史中に於て、有數の隆盛を極め、其の文物制度は、何れも皆な、時代の特徴を示し、大に後代に誇るべきもの少なからず、書道に於ても、亦た其の通りであつたが、晩唐に至つて、凡ての事が衰兆を來すと共に、書も亦た頽俗に陥り、遂に人をして厭嫌の情を起さしめ、是非とも刷新を要する氣運に向つて居ると、果して唐は亡びた。

次で起つた所の五代は、政治上に於て、赫々たる功名の見るべきものはないが、氣運は慥かに、唐の惰眠を警醒

唐の惰眠と五
代の崛起

三三三

するに存し、書道に於ては、楊凝式の出づるあり、自らおのづか宋の四大家の爲めに、一派の法門を開くの勞を執つたことになつて居る。

楊凝式(五代人)

名は凝式、字は景度、其の書は本と顔真卿に出たと云ふのであるが、不衫不履を以て、遂に自ら家を成し、蘇東坡、黄山谷の如きも、これを推奨して居る、獨り其の勢奇にして、力強きのみならず、其の骨裏の謹嚴なる、眞に人をして、間を尋ねべき無からしむ、是れ必らずしも顔を摹し、柳を擬するに沾々たらずして、而して顔柳の實を備へて居るとも云ふべきであらう。

神仙起居位(楊凝式草書) 懷素より脱胎し、極て縦横なる

書振りであるが、而も雅道を傷けず、「停雲館帖」にこれを收む。

韭花帖(同上) 醇古淡雅にして、實に三唐の殿たるに足る、此の帖の墨迹は、もと項子京の所藏にして、清初の諸帖には、多くこれを刻して居るが、惜むらくは、眞を失つたものが多い、楊州の董恂が、石に刻したものの、み精好と爲すことが出来る。

七 宋—楷、行、草

宋の四大家

宋の四大家とは、蘇東坡、黄山谷、米襄陽、蔡忠惠の四人を指すので、蘇は顔に近く、黄は柳に近く、米は褚に近く、蔡は虞に近しとの評もあるが、四家の各一體を有するとは、宛も東坡山谷の詩派が、唐法を以て律することの出来ないと同じことだと謂つて居る人もあつて、其の通りである。四家の外にも、梅聖俞、蘇舜欽、王禹偁、歐陽修、王昇之、張即之、陸放翁等の如き、尙ほ能書の名を遺して居る人はあるが、書蹟の徴すべきものは、甚だ少なく、筆蹟も亦た大に遜る所あれば、これを略することとする。宋人の碑の特徴は、多く行草を雜へて居る

未盡乎而多劣之是使前賢失指於將來
不心惜我觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎
機合乎道以終始者與其俞昭王曰伊尹放
大甲而不疑大甲受放而不怨是存大業於
至公而以天下為心者也夫欲極道之量務以

ことである。

蘇軾(宋人)

○

鳴鶴

奇才絶藝少儔倫 鐵劃銀鈎亦足珍

千古一言傳秘訣 讀書萬卷始通神

名は軾、字は子瞻、東坡と號す、唐宋八大文豪の一人で、父に蘇老泉あり、弟に蘇轍あり、博學能文、才氣煥發、最も策論に長じ、また詩賦を能くし、一世を叱咤して、天下を籠蓋するの概を有して居た。或は曰く、其詩は、華嚴法略の如く、文は萬斛の泉源の如く、書も亦た頗る此の意を得たりと、自ら有宋第一の地位を占め、行書「醉翁亭記」の如きは、以て其の概を見るべく、書蹟の流傳

せるもの、亦た極めて多い。

(考)

楊守敬曰く、東坡の書「羅池廟」は、端莊流麗を兼ね有し、快雪堂刻する所の諸札、經訓堂刻する所の「楚頌帖」、煙江疊嶂帖」は、皆な二王の後に於て、獨出時に冠たり、別に生面を開く、或は掩筆なるを以て、これを諳り、或は其の季海を學ぶを謂ふも、皆な皮相なり、「洞庭春色」、「中山松醪」は、頗る側鋒を用ふるも、是れ坡公の本色であつて、秋碧堂のこれを刻したことは、過ちでなく、經訓堂の複刻を、錢梅溪が偽作としたのは非なり、「送叔師嶺南詩」は、擘窠の書で、老橫古厚、郭蘭石の跋に、「老羅の道に當る如く、百獸震懾す」と謂つたのは、適さに善

西樓帖

く形狀せりと云ふべきである。
西樓帖(蘇軾行書) 其の原刻一大冊、嘗て端方の所藏たりしが、後ち廣氏、廖氏に傳はり、京師南海會館に重刻せるもの稍や可なり。

晚香堂帖

晚香堂帖(同上) 明の陳繼儒の刻に係る、舊本凡そ二十餘冊、「西樓帖」の精なるに及ばざるも、甚だ選擇を謬らず、其の後蘇州に於て翻刻せるも、眞を失へり。

景蘇園帖

景蘇園帖(同上) 楊守敬が、成都の楊葆初の爲に選刻する所にて、大抵舊本より摹出し、偽作なし、應さに蘇書の大觀たるべし。

蔡襄(宋人)

○

鳴鶴

蘇挾風濤黃盪漿 米顛豪翰別開場
不爭而後見君子 溫厚須推蔡莆陽

蔡襄、字は君謨、評者或は以て宋の顔真卿と爲す、其の書する所の「洛陽橋碑」の大楷の、最も整然たるものが爲めである、されどこれを以て、顔の「中興頌」に比すれば、邈乎として、距離あるとは、識者の定論である、而して又、黄山谷の如きは、「君謨の渴墨帖は、彷彿として晋宋間の人の書に似たり」と謂ひ、又其の眞行の簡札は、能く永興(虞世南)の室に入る」とも稱して居る。

蔡惠忠帖

蔡惠忠帖(蔡襄書) 閩刻四册あり、其の中小楷茶録一册あり、頗る精。

米芾(宋人)

米元章の集字

名は芾、字は元章、襄陽と號す、其の書、初め意を刻して古人を宗としたる爲め、一時集字の譏りを蒙つた程であるが、其の集めて大成し、既に自から一家を成すに至つては、變化縱横、轍迹の求むべきなく、盛名一代に震ふ、時に諧氣なきにあらざるも、而も其の諧は、雅を傷くるに至らず、梁同書の如きは、これを稱して、「痛快沈着は、米公獨りこれに當る」と稱揚して居る、但し一個の碑を留めず、到る處に僞作多く、襄陽なる米氏詞堂の收むる所すら、幾んど全部僞作なりと云ふに至つては、痛歎に堪へざる次第である。

(考)

楊守敬曰く、米襄陽は、懸肘を以て字を書す、故に超邁

絶倫なり、然れども其の率意不穩の處も、亦た時に紙上に現はる、故に劉石庵は、疵つて俗と爲す、唯だ其の小楷は、縦横跌盪、獨り門庭を闢く、褚河南の臨本に跋する、蘭亭二通の如き、一は巾箱本にして、陳氏の玉煙堂にこれを刻し、一は天幅本にして、詒晉齋これを刻し、「西園雅集圖」は、戲鴻堂に刻す、刻法未だ精ならざるも、其の絶大神通を想見すべし。

白雲居米帖

白雲居米帖(米芾書)原刻の傳ふるもの極めて稀なり、蘇州に於て重刻せるは、庸陋見るに堪へず。

英光堂米帖(同上)宋の岳珂の集むる所にして、重刻本あり、前後二卷、皆大行書なるも、全たからず、加ふるに率易の字にして、選刻の精ならざるを知るに足る。

英光堂米帖

貫經堂帖

貫經堂帖(同上)收むる所博くして、刻また悪しからざるも、石質殊に薄くして、破碎に堪へず。

黃庭堅(采人)

庭堅、字は魯直、山谷と號す、其の詩に於て、新に一生面を開くが如く、書に於ても、亦た前人を蹈襲せず、瘦勁奇峭、自ら一家の面目を具へて居る、但し其の眞蹟の存するもの多からざるに反して、僞作は甚だ少なからず、殊に碑刻は殆ど絶無にして刻帖の如きも、南昌の萬氏が輯むる所の四冊の外、また見るべからず、山谷は書を論ずるに、最も韻の字を重んじ、因て言ふ「士の世に生まるゝ、以て百事を爲すべし、唯だ俗なるべからず、俗は則ち醫すべからず」と、其の「瘞鶴銘」の高韻に得る所あり

しも、亦これが爲めであらう。

(考)

楊守敬曰く、黄山谷の書は、集帖に收むる所の手札、及び墓志稿の如きは、尙ほ是れ眞跡である、最も奇崛なるは、唯だ「伏波神祠」の一帖のみで、詒晋齋、聽雨樓ともこれを刻す、「砥柱銘」は、少壯の作たり、近ごろ「幽蘭賦」なるものが、項城の袁氏から出て、河南の極縣にて、石に刻したものは、甚だ雄偉である、併し間々俗筆もある、潘孺初先生は、疑つて明の沈石田、文衡山輩の擬作として居る、此の論俗驚を顧みず云々。

八 元明清の諸家

古來書道を論ずるものは、概ね筆を唐朝に絶ちて、また其の後を語らず、金石遺文を蒐集するもの、また元代を限りとして、其の後に及ばず、鳴鶴翁も、持論としては、近代をも棄てられないのであるが、漢魏初唐に對するとは、自ら意味が異つて居る、されど今の書を學ぶものにて、意を此の時代に用ふるもの、また必らずしも絶無とは謂はれないから、聊か其の梗概を左に記して見よう。

元の書人

趙孟頫(元人)

○

鳴鶴

元初猶見晋唐遺 藝苑推爲百世師

近代また棄つべからず

文董堂々樹旗幟 出他鐵壁竟無時

三四六

名は孟頫、字は子昂、松雪と號す、吳興の人で、宋の宗室たり、文敏と諡す、唐宋以後有數の大家で、其手に成る所の碑碣は甚だ夥だしい。併し多くは行書で、其の正楷と見るべきは、獨り「虞伯生」、「劉公神道」の二碑に限られ、碑版の書法は大抵李北海に胎息し、刻帖には、「清華齋帖」四冊、「松雪齋帖」四冊、其の他數ふるに暇のないほど澤山あるが、簡札は概ね王右軍より脱胎して居る、趙の書は、和潤寛博を以て優り、往々過熟の譏を免れないとは云へ、熟中生あるものに至つては、實に無上の妙味を有して居る、嘗て梁同書の見たと云ふ、松雪の「臨皇象急就篇」の墨本は、眞に古にして、眞に厚なるもの、

又其の「寄妻母家信冊」は、竹紙を用ひて、末に騎縫月日花押あり、用筆秀絶にして、寰區一點圓熟の習氣なく、此れ人間未だ見ざるの趙字、實に從來至妙の趙字たり、此の二種を見れば、他の趙氏の諸帖は、皆な廢すべし云々の如き、又以て其の一面を窺ふに足るであらう。其の他元代の書人として、記すべきもの少なからざるも、煩を省くが爲め、單に其の姓名のみを記載することゝしよう。

吳仲圭

鮮于樞

康里子山

鄧文原

鏡介之
中峰和尙

明の書人

明人の特長

明人の特長は、行草であつて、其の所謂草書は、張旭、懷素の枝流と見るべく、未だ以て晋人の矩度を語るに足らず、碑刻もまた行草の外に出でず、董其昌の雄を以てして、尙ほ一個の正書の碑を遺して居ないのを見ても、他は類推すべきである。明朝書人の重なる姓名を記せば左の如し。

- 解大紳
- 張東海
- 宋克之 (章草)

清の篆隸は直に漢に接す

- 文徵明
- 董其昌
- 邵寶之
- 李東陽
- 王寵
- 祝允明

清の書人

清朝に至つては、著しく篆書と隸書とが發達し、唐宋を凌いで、直ちに漢に接するの有様を呈し、鄧完白、楊沂孫の篆書、桂馥、陳鴻壽、黃易之の隸書の如きは、古先に原本して、自ら一機軸を出したるものと云ふべきである。

吳榮光
成親王
梁同書
梁嶽
潘存
桂馥
伊秉綬
陳鴻壽
黃易
楊峴
李宗瀚
陳希祖

隸
同
同
同
同
同

陳奕禧
何焯
汪士鏞
鄭篔
王澐
蔣衡
劉墉
鄭燮
金農
王文治
翁方綱
馮敏昌

鄧石如 篆
 楊沂孫 同
 莫友之 同
 何紹基
 翁同和
 楊守敬

書訣終

大正六年十二月十四日印刷
 大正六年十二月十七日發行

書訣
 定價金參圓



發賣所

東京市神田區
 小川町一番地

文會堂書店
 (電話本局一四三三番)
 振替東京三五二三番

編纂者 池田常太郎
東京市本所區龜澤町一丁目十四番地
 發行者 岡添虎太郎
東京市京橋區弓町廿五番地
 印刷者 高橋郁
東京市京橋區弓町廿五番地
 印刷所 三協印刷株式會社

終